

日本記者クラブ会報

■『日米関係』シリーズ(Ⅲ)

日米ともにコースを

切り変えるとき



ジョージ R・パッカード

(ジョーンズ・ホプキンス大学 SA AIS)
(学長兼ライシャワーセンター所長)

最近の日米関係に関して、私どもは大変楽観的な見方をしていて、ユニークであるかもしれませんが、ワシントンはもちろん東京でさえも、こうした楽観論を見出すことがむずかしくなっています。

この四、五月の二か月は、戦後の日米関係の歴史の中でも最悪の時期であったことを考えますと、私どもの楽観論はちょっと奇妙に聞こえるかもしれません。四月には、ケッパート条項を含む過激な貿易法案が、下院を通過しました。また、日本側からは記録的な貿易黒字の数字が発表され、逆に米国の記録的な赤字が明らかになりました。いわゆるロン・ヤス会談もたれましたが、貿易問題についての解決策はもたらされなかった。そして、米政府の三億ドルにのぼる奇妙

な対日経済制裁の決定という状況からしますと、楽観論は不思議な印象を与えるかもしれません。

日本に怒る四つのグループ

悪い出来事が重なりましたが、世論にも劇的な変化がみられます。七〇年、八〇年代初頭の貿易摩擦が激しかった頃でさえ、日米両国民の間には友好的な感情が保たれていました。しかし、ごく最近のニューヨーク・タイムズ、TBS、朝日新聞の世論調査によると、米国の世論にも大きな変化が現れてきています。読者や視聴者が、マス・メディアで報道されている出来事について、認識し始めたということかもしれません

ん。それが、世論の急激な変化の誘因になっているのかもしれない。

しかし、この世論調査の結果を解釈するのは、実は容易ではないのです。米国のデータにはちょっと矛盾がみられます。日米間に友好的な関係が存在するかという質問に、「イエス」と答えた人たちが七七%もいます。しかし、貿易赤字を解決するためにはより高い貿易障壁を設けるべきか、という質問にも、六三%の人たちが「イエス」と答えているのです。

日本に対する怒りが主にみられるのはワシントンだ、ということには同意していただけないと思います。田舎の方に行きますと、いまだに日本製品は人気で、日本製のものを買おうと列をなしています。輸入価格が上がっているにもかかわらず、そういう光景がみられます。

日本に対する怒りをあらわにしている、ないしは持っているのは次の四グループだと思っています。

まず第一に議会です。上院、下院ともです。典型的なのはダンフォース上院議員ですが、日本製品の攻勢のために高失業率になっている地域を、選挙区に持つ議員たちが第一のグループの中核です。

次はビジネスの分野です。日本で成功し得なかった

目次

日米ともにコースを切り変えるとき

G・R・パッカード ジョンズ・ホプキ
ンス大学ライシャワーセンター所長 1

ゴルバチョフ政権下の文化状況

水野忠夫 早稲田大学教授 7

企業、あるいは日本市場へ参入できなかった企業です。第三は商務省の役人たちです。いわゆる「日本たたき」をすることによって、昇進できると考えているような人たちです。第四はマス・メディア関係者で、セオドア・ホワイト（ニューヨーク・タイムズ）が典型的ですが、日本に対して敵対意識を持っている人たちです。

これら四グループの中には、これまで耳にしたことのないような爆発的な怒りをあらわにしている人たちがいるわけです。ところが、その一方で、本当に日米関係を懸念している人たちもいます。米国の貿易、財政赤字を真に心配している人たちです。米国の方にこそ問題があるのだという考えの人たちで、日本をスケープゴートにしようとする立場ではありません。世界最大の債務国として、このままやって行っていくのだろうか、このようなことを続けていいのだろうか、という懸念を彼らは持ちます。世界における米国の立場、安全保障上あるいは経済的なコミットメントからしても、このような事態を放置してはならないと考える人たちです。自らが持てる富を超えて支出をしないといたようなことはするべきではない、という考え方の人たちです。

日本のハイテクへの不安も

日米関係の現状に関して、リーズナブルな批判や意見を集約すれば、次の四つの議論に整理できるだろうと思います。

まず第一に、市場へのアクセスという点からみた場合、相互主義が欠如しているという指摘です。日本企

業が、米国市場に自由に参入でき、銀行や企業も買収でき、直接投資が自由なのに対して、米国企業が、そういう権利を日本で与えられていないのは受け入れ難いという意見です。二番目は、日本企業の輸出慣行に関するものです。一般的に日本企業は非常にタフな競争相手だとみられています。時にこれが行き過ぎで、いわゆる不公正な貿易に墮することがあるという見方です。たとえばダンピングであるとか、米国企業をターゲットにしての激しい攻勢と挑戦などに対する批判です。もちろん、これを立証するのも、実証をもつて反論をするのも大変むずかしいわけですが、これはかなりの広がりをもって受容されている見方だと思えます。

三番目は次のような認識であります。市場開放や半導体のように、協定がつけられても日本はそれを守らないという批判です。米国は多くの弁護士が活躍する社会ですので、契約が一度成立すれば、これを守らなければならぬということが重視されるわけです。ですから、守られていないことが分かった場合、あるいはそう思った場合には、非常にアンハッピーになるわけです。弁護士が何もいものだと言っているわけではありませんが、弁護士を日本へ輸出することができれば、貿易問題の解決にいく分かの貢献が可能かもしれません。日本側が訴訟に追いまくられて、米国側の生産性が上がるということになるかもしれません。(笑)

四番目は非常に重要なものです。米国側からみた場合、日本の技術へアクセスする機会が閉ざされているという認識です。特に日本政府がスポンサーになって進めている技術開発プロジェクトやパテントについてです。日本は新しい技術に関して最先端を行っている

ので、米国が遅れをとってしまったのではないかという不安感が広がっているわけです。デトロイトで起こったことをくり返してはならない、特に半導体産業でくり返してはならないという強い感情が存在します。米国としては何らかの施策によって、こうした傾向を変えなくてはならないという考え方です。

以上のような四つの認識に影響されて、富士通のフェアチャイルド買収問題が、あのような帰結になったのだと思います。国家安全保障上の観点からではないと、私も政府筋から聞いております。富士通がどうのこうのということではなく、一般的に日本の技術の優位性に対する恐れが広がっているということ、それから、ほう大な貿易赤字が表面化してきているというタリミングの悪さも、あの決定の理由の一つであつたろうと思われまます。

もっと根深い要因としては、今後出てくるであろう「挑戦」の問題があります。米国に挑戦を仕掛けてくる国々の先頭を、日本がぎつているという認識です。今後は日本だけでなく、韓国や台湾、あるいはもっと先をみれば中国も、競争相手として出てくるのではないかとこのように恐れがあるのだと思います。そういうチャレンジを受けて、米国が空洞化してしまうのではないかと懸念です。米国が農業国に墮してしまい、モンデールが言ったように、米国の子供たちが日本製コンピュータのまわりを掃除しているようなことになりかねない、というような恐れです。

米議会とホワイトハウスの戦い

このような背景を考えると、議会は必ずや何らか

みても、一人当たりGNPでみれば世界一になったとしても、なかなか一生懸命やってきたことを止めるというわけにいかない。しかし、こういったことがあったにしても、両国ともこれまでのコースを変えていなくてはならない。これから歩むべき道を変えていなくてはならない。そして、変化をもたらすに際しては、外圧によるのではなく、国内の政治家、経済人のリーダーシップのもとに、これを行わなければなりません。

日本の新しい三枚のカード

日米間では、今後ともむずかしい交渉が続くと思えます。イコール・パートナー同士の交渉ということになります。ライシャワー元大使はよく「日米はイコール・パートナーだ」と言ってきたわけですが、当時は誰も信じなかった。しかし、日本はいまでは交渉のテーブルづくりに当たって、六〇年、七〇年代には持つていなかった、新しい切り札を持っているわけです。その第一は、日本の資金、資本の流れです。米国への資本流入というカードです。二枚目は日本の技術です。米国がほしがっている技術です。三枚目はより複雑なカードで、詳しく述べる時間はありませんが、ゴルバチョフが何らかの形で、日本に呼びかけてくるだろうと、私は思うわけです。ゴルバチョフは東京に対してラブコールをする。これは日本側にとっても、大変魅力的なものであると思います。そうすると、日本がこれをソ連カードとして使うか否かは別として、切り札として持つということになります。

日米の長い歴史をみますと、振り子のように極端か

ら極端へ大きく振れるということがみられました。お互いに相手を過小評価するということも何度もみられました。これが、日米関係における「落とし穴」と言いましうか、危険性であります。従って、プレスンの役割も大切で、感情的になっっている時代こそ、マス・メディアが理性的な指導性を発揮することが期待されます。ワシントンあるいは東京で取材する場合、極力感情を抑え理性を勝たせるということを考慮していただきたいと思えます。

質疑応答

佐々木(CBC) 日本の下村という経済学者は、いまの世界経済の問題の原因は米国の財政と貿易の二つの赤字にあると主張しています。これについて、今度のベネチア・サミットでも、レーガンさんからは何ら発言がなかったようなのですが。

バックカード 議員や国民のほとんどが分かっていることです。レーガン大統領が許めたら、あるいはその前にでも増税が必ず行われるだろうということですが、これは十分予想されていることです。もちろん、誰も増税は好まないわけですが。

モンデルが大統領選で負けたのも、増税を主張したからだと言われています。また軍事費も今後は削減が必要になるでしょう。国防総省には依然として大きなムダがみられるわけです。SDIについても、疑わしいと思っている人は大勢いるわけです。SDIについては、どの程度までこれを展開できるか、どの程度迅速に計画を実施し得るか、誰も真に理解している人はいないと思えます。

民主主義社会では、政策上の間違いも生じるわけです。しかし、それを是正する機能も備わっています。現在の大統領選のキャンペーンの中でも、これはみられるわけです。民主党、共和党のいずれから出るにしても、多分、今度は若々しい人が選ばれるだろうと思えます。若くて問題を解決し得る人が選ばれると考えています。

鈴木(読売) 日米とも指導者の交替が日程にのぼってきています。日本の場合、現在の総理より内向きの政策がとられることになるだろうと思われる。また米側では、共和党の政策を批判する形で、民主党大統領が出現する可能性がある。これらが日米関係にどんな影響を与えるか考えるか。

バックカード 誰が大統領になるかと、誰が総理になるかとあまり関係ないと思えます。日米関係は非常に広範囲な形で定着しています。もちろん、ロン・ヤスといったようなムードづくりも役立つものですが、誰が指導者になろうと、いずれも日米関係の重要性を分かった人がその座につくと思うので、その点では心配がないと思えます。

米側の場合、好ましい大統領とは、議会を十分に押えて指導力を発揮できる人です。共和党は弱体化しているようにみえますが、まだまだ力があると思えます。民主党の方にはまだ実質的な候補がない。最良のチョイスは、クオモ・ニューヨーク州知事と言われていますが、彼が立候補しないと云えば言うほど人気が上がるという状況です。もう一人ブラッドレー上院議員も人気がありますが、彼も立たないということでは人気がある。いずれにしても労働運動や保護主義団体と特に深く結びついてさえいなければ、民主党の大統領

が生まれても、日米関係に大きな変化はないと思えます。

是非は別としてソ連政策や中国政策はあっても、米国にはいわゆる日本政策がない。そのため内閣府の内閣で各省庁が争い、議会でも同じ状況がみられるわけですが。私は、日米間に恒久的な常設の賢人会議を設置することを提案したいと思います。メンバーは、政界、経済界の指導者で構成し、その下に強固な専門スタッフを置く。

まず第一にやるべきことは、事実認定、ファクト・ファインディングです。第二には仲裁、ミディエーションです。ある意味で国家主権を超えたような組織づくりを提案したいと思います。カナダとの自由市場に開く協定で、単に話し合いがもたれたというだけでなく、米加の間にバイ・ナショナルな組織がつくられ、両国間の問題の解決にあたったことがあります。これが前例になると思います。

佐々木（日本テレビ） 日本に怒りを持つ四つのグループの中に、マス・メディア関係者のグループがあると指摘したが、米国のマス・メディア全体の中で、これはどの程度の影響を持っているのか。また、日本がこうしたグループにどう対処したらよいと考えるか。

バックカード マス・メディア関係者の誰が「ジャパン・パッシング」をやっているかを、一般的に指摘することはむずかしい。ただ、あちこちにそういう向きがみられるということは言えます。経済関係の役所をカバーしている記者たち、商務省とかUSTR詰め記者たちに、そういう傾向がみられます。国務省とか国防総省をカバーする外交専門記者とは別の人たちが

に、そういう傾向が強いようです。そういう人たちは当然それぞれのソースを持っています。ソースである商務省やUSTRの意向を反映していると言えます。

すでによく知られていることですが、商務省の高官の中には、大変にフラストレーションの高まっている人もいます。米国のビジネスマンの間に焦燥感が高まっている、それに対処しなくてはいけないということ、商務省がフラストレーションをかかえてしまう。それがジャーナリストの方へ洩れていくということになる。それが「ジャパン・パッシング」につながるという構図かもしれません。

一般的傾向としては、日本での潜在が長く日本語もよくできるジャーナリストほど非常にリーズナブルで、取材にあたってフェアーであると言えます。たとえば、日本においては円高問題があり、米国内に競争力の欠如があるということも正確に認識しています。

またワシントンには、いまのような不満のほかに「ただ乗り」といったものもあるわけです。米国民が高い税金を払い防衛費を負担しているのに、日本は「ただ乗り」をしているのではないかと、日本は「またまた敵が心をおおっているかもしれない」、これが唯一の解決策は十分に問題を正確に理解している、ジャーナリストを育てることだと思えます。そうした人が活躍することが重要です。

坂本（NHK OB） 恒久的な賢人会議の提案を興味深くうかがいましたが、現存の下田会議、三極通商会議や四極通商会議、日米財界人会議といったものを活用してやった方が、すでにインフラストラクチャーがあるのだから、その方がいいのではないのでしょうか。

バックカード 下田会議等々を批判する気は毛頭ありません。日本をよく知らない、日本へ来たことのないアメリカの人が日本を訪れ、米国についてあまり知らない日本人が、このような会議に出席して意見を交換することは重要だと思います。

私の考える恒久的賢人会議は、これらに代わるものではないです。いわばそれらの活動をフォローアップするような組織です。多くの会議では互いに楽しい時間を過ごし意見をかわし、報告書が出ることもあるが、一般にはあまりフォローアップが行われな

い。私の提案する賢人会議は、専門家が事実調査を行うものです。経済問題の多くでは、なかなか事実について互いに合意することができない。一体何が事実なのか明確でないで、事態が往々にして悪化してしまふ。ですからまず第一に事実調査をやりたい。半導体価格一つにしても認定が困難なわけです。それをほっきりさせ、その上で問題解決のための提案をする、というようなことを考えています。

岡村（朝日放送） 経済活動は国境を超えているのに、政治は国境内にとどまっている、というようにところがいろいろところで指摘されていますが、賢人会議の提案もこうした考えと関係しているのか。また、こういう状況ではナショナルリズムがあまり火を吹かない方がよいと思うが。

バックカード ライシャワー、ジョンソン、ホッドソン、インガソルといった方々に、個人的にこの提案をすると、「いいアイデアだが、私にやれとは言わないでほしい。私の責任はもう終わったのだから」と逃げられてしまうのですが、一番大切なことは適当なリー

ダーを探すことだと思いません。これは可能だと思いません。リーダーは、単に国内で尊敬されているだけでなく、ビジョンを持つことができ、大局的見地から国際問題を論じることが出来る人でなければなりません。ナショナリズムというのを考えた場合も容易ではないし、悪用されると火に油を注ぐことになりかねないが、よいリーダーを得れば可能だと思いません。

水野（朝日） 防衛問題がスムーズにいつている背景の一つには、日本のハイテク産業が、米国の軍事産業にとつても、不可欠なものになってきているという現状があるような気がします。また次期支援戦闘機の開発、東芝のココム違反問題、SDIの研究成果の帰属にしても、日本企業の方では、セキュリティという名の下に、自分たちが被害者にされているのではないかという懸念も広がっているようです。米国は、日本のハイテク産業をチャレンジャーとしてとらえているのだろうか、それともコラボレイターとして考えているのだろうか。

バックカード 日本の技術は国防総省にとつても不可欠なものになってきています。チャレンジャーでありコラボレイターとして、その両方として日本はみられていると思う。そして、これがまた問題解決の糸口を示していると考えます。日米にとつて最大の問題は、お互いの不安感です。米国は、日米に技術面で遅れをとっているのではないかと不安になっている。日本には明治以来、食糧、原材料などの一次産品の供給と、市場へのアクセスという点で、ずっと不安感があつたわけです。しかし、一夜にして双方の不安を解消することは可能です。互いに不安と感じている分野につい

て、保障し合うことです。米国は、日本に農業へのアクセスを与える。時にはその生産手段ないしは輸出手段の所有も認める。日本は、ハイテク分野への米国のアクセスを認める。時にはその企業の所有なども容認する。双方に恩恵のある形で不安を解消するような前進的な解決策は十分考えられると思います。もちろん、言うは易し行ひはかたしですが、可能性はあると思います。

（通訳 西村好美 文責・編集部 62・6・9）

ジョージ R・バックカード氏 (George R. Packard)

略歴 一九三二年五月二七日、ペンシルバニア州フィラデルフィア生まれ。プリンストン大学卒。六〇〜六二年東大大学院研究員。六三〜六五年ライシヤワー駐日大使特別アシスタント。六五〜六七年「ニューズウィーク」で外交問題担当のチーフとして、國務省、ペンタゴン、議会をカバリーする。六七〜六八年「ワイラデルフィア・ブリティッシュ」のホワイトハウス担当。六八〜七五年「ワイラデルフィア・イブニング・アンド・サンデー・ブリティッシュ」の編集、経営に参画。七五年にペンシルバニア州から上院議員に立候補。テレビのアンカーマンなどを経て、七九年からジョージ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院 (SAIS) 学長、八四年のライシヤワーセンター設立後、所長を兼務。著書は『Protest in Tokyo: The Security Treaty Crisis of 1950』(1965)、『Japan, Korea and China』(1979) など。

■研究会『ソ連—その実態と意図』

(XIV)

ゴルバチョフ政権下の文化状況

水野忠夫

(早稲田大学教授)



きょうは、ゴルバチョフ政権下の文学、芸術の状況についてお話しするわけですが、文化というものを、どういふふうと考えていくかという時に、必ずしも政治の動向と直接関わりない場合もあり、ある程度、時間差が出てきます。つまり、ゴルバチョフが出現して、いろいろな形でレストロイカということが言われているわけですが、それがすぐに文化に直接反映していくとは言えないような状況が、いまのところあります。ただ、幾つかの動きはある。何かの契機がはじまっているとは言えるので、まずその辺から紹介していききたいと思います。

八五年一月からの「第二の雪解け」

いま、ソ連は「第二の雪解け」と言われますが、確かに、ある程度、そう言えるのではないかと思います。「雪解け」という言葉でまず思い出されるのは、スターリン批判を用意したイリヤ・エレンブルグの

「オーチェベリ」(雪解け)という小説です。オーチェベリという言葉は、厳しい冬が過ぎて、少しずつ雪が解けはじめる状況で、まだ完全に雪が解け去ったという形ではなくて、雪が解けはじめていてぬかるみがあったり、あるいははじめじめしたものが残っている。ロシアでは、三月頃ちよつと温かい日が続いて雪が解け始めるのですけれども、それに対して、またぶり返しがくる。そういう何度かの雪解けがあつて、本格的に春が訪れるのは五月になります。

エレンブルグの「雪解け」の象徴したのが、ちよつどスターリン批判後の文化の問題であったとしたならば、いま長い雪解け後の凍てつきとぶり返しの後を受けて新たな雪解け、もしかしたら本格的に春が訪れるかもしれない、そういう雪解けになりつつあるのではないか、と言われています。

特に昨年の暮れ、サハロフ博士が釈放されたことは、これまでの反体制運動も含めて、文化界をかなり活気づける要素になったと思います。

ブレジネフからアンドロポフ、チエルネンコ、そしてゴルバチョフが書記長になりますが、八五年の一月頃から、文化の領域ではいろいろな動きが出てきています。

八五年一月には、モスクワのサドーワヤ通りにあるミハイル・ブルガーコフの住んだ家を博物館にしたかどうか、女流詩人のマリーナ・ツヴェターエワが住んでいた家も博物館にしようという提案がなされています。ボリス・パステルナークやアンナ・アフマトワの作品を公刊しようという動きが、やはりその頃から始めています。ブルガーコフ、ツヴェターエワ、パステルナーク、アフマトワらの本格的な復権が始まるのではないかと期待が、ここから出てきたわけです。

ブルガーコフについて言えば、彼が一九四〇年に死んでから約二〇年間、その作品はほとんど発表されず発禁状態が続いていて、彼の代表作である『巨匠とマルガリータ』が発表されたのが一九六六年です。ちよつど「雪解け」があつて、フルシチョフによるスターリン批判が行われて、それが様々な問題をはらみながら一つの終着を迎えていくような、そういう時期が一九六六年です。六五年には、反体制的な作品を書いたとして、ユーリイ・ダニエル、アンドレイ・シニャフスキイに対する裁判が行われています。ついでに言えば、六一年にアレクサンドル・ソルジェニーツィンが『イワン・デニーソヴィチの一日』で登場しますが、その三年後からは、国内での作品発表がいつさい禁じられてしまいます。

一九六六年と言いますと、ブルガーコフの作品は発表されたものの、そこで「雪解け」は完全にストップ

してしまふ。本来ならば、この『巨匠とマルガリータ』はもつと早く出てもよいわけです。つまり、出版が計画されてから公刊されるまでの時間差があつて、結局、もう『雪解け』が完全に終わつてしまふその時に、作者の死後二六年ぶりに『巨匠とマルガリータ』が発表されたのです。

ブルガーコフは一八九一年にキエフに生まれ、キエフ大学の医学部を出て、最初、医者をしていたのですけれども、革命直後の二年、作家になろうとモスクワに出て作品を書き始めます。生前、ソ連で発表された彼の作品は、戯曲は別にしますと、『チチコフの遍歴』、『運命の卵』を収めた作品集『悪魔物語』（二五年）一冊だけでした。ところが、それがロシア革命を諷刺するものであるということで、『反動作家ブルガーコフ』という烙印が押されて、彼はたくさん小説を書いていたのですけれども、それがまったく日の目を見なかつたわけです。特に『巨匠とマルガリータ』は失明して死ぬ間際まで書き続けられましたが、彼の初期の作品はまだソ連では公開されていません。

いまアメリカでブルガーコフの全集がロシア語で出版されています。ソ連で発禁になっている、たとえば『犬の心臓』とか『悪魔物語』なども含めて出版中です。これまでにフランス、ドイツでロシア語版も出ていますし、英訳、仏訳、日本語訳も含めて国外で活字になつていたものが、今度はソ連国内でも出るのではないかと期待されます。

女流詩人のツヴェターエフは、ロシア象徴主義の系列に属する詩人で、革命前に処女詩集を出して注目されますが、革命後に亡命します。そして一九三八年に、ロシアの詩人は祖国から離れて生きることは出来

ない、という思いを持つて帰国しますが、国内で身の周りに起こっているスターリンによる粛清の悲劇を目のあたりにし、ブルガーコフの死んだ翌一九四一年に、ツヴェターエフは自殺しています。

パステルナークはご存じかと思いますが、アフマトワも、やはり女流詩人で、詩人のニコライ・グミリョフの妻です。グミリョフは一九二一年に反革命罪で銃殺され、息子もラーゲリに送られています。アフマトワは、その思いを『レクイエム』という詩に書いていますが、これはもちろん、ソ連では発表されていません。アフマトワが特に有名になつたのは、一九四七年、当時の文化相ジダーノフによる形式主義批判のときですけれども、ジダーノフが楡玉にあげたのが、アフマトワと、それからミハイル・ゾーシチュンコという諷刺作家だったのです。

つまり、ソ連においては、ブルガーコフにしても、ツヴェターエフにしても、アフマトワにしても、熱烈な読者を持つていて、その作品は非合法下でもひそかに回し読みされている作家であり詩人でありますけれども、本格的な再評価がまだ行われていなかっただけに、八五年の一月から始まつた動きは非常に注目すべきことなのではないか、という気がします。

八五年以降の新たな『雪解け』の動きは、文学、映画、あるいは演劇を中心として進行中です。ロシアの場合、やはり、作家や芸術家、知識人がいろいろな形で現実と関わっていくわけですけれども、第二回ソ連作家同盟大会が開かれたのが五四年で、そこで『雪解け』の動きが出てきて、五六年の第二〇回党大会で本格的なスターリン批判が始まつた経過を思い起こすと、作家、芸術家を中心とする知識人たちの動きは、

ある意味では状況を先き取りしていくようなところもあると考えられます。

デミチエフ文化相の更迭

八五年の末には、ゴスキノー（国家映画委員会）に対する批判も少しずつ出てきています。八六年五月にソ連映画活動家同盟の第五回大会が開かれ、六月には第八回ソ連作家大会が開かれ、具体的な動きとなつて出てくるわけです。

その間にもモスクワ・タガンカ劇場の俳優でシンガー・ソングライター、そして詩人でもあるウラジミール・ヴィソツキイが八〇年に死にましたけれども、八六年三月にはヴィソツキイの作品を出すために、文学的遺産を記念する委員会が設置されています。ヴィソツキイは舞台で演技し歌うだけでなく、自分の詩を朗読したりするのですけれども、その詩のすべてが、実際に活字になつたわけではありません。ヴィソツキイは、自分の詩に曲をつけ、歌つたりするわけですが、活字にはならないまま、それがテープを通して、多くの人たちに愛唱されています。そういう作品を集大成して、本にしようとする動きも出てきています。

また、八六年の四月にはグミリョフの生誕百周年を迎えて、この詩人にたいする再評価の動きも始まっています。グミリョフは象徴派の系列の詩人として出発したのですけれども、象徴派を乗り越えるために、アクメイズムの運動を創始します。ちょうど未来派の先駆けと考へてもよい詩の運動の理論の組織上のリーダーでした。グミリョフの周囲には、妻のアフマトワ

とか、あるいはオーシブ・マンデリシユタームという詩人が集まって、二〇世紀の新しい詩を創造しようとしていました。

この時期、具体的に言えば、八六年三月にソ連文化相であったデミチエフが更送されたのは注目すべきことです。デミチエフは、一九六五年から党のイデオロギー担当書記に就任し、おそらく六五年以降のソビエトの文化にもっとも責任ある立場にいた人です。

この人の責任を、いろんな人たちが追及しているわけですが、たとえばタガンカ劇場の指導者であり、すぐれた演出家であって、いまは国外にいるユーリイ・リュビエーモフが「デミチエフこそは何百人という文学者、芸術家が祖国を捨てざるを得なかった原因となつている人物である」と語っています。

つまり、この間に、ソルジェニーツィンの国外追放をはじめ、作家で言えば、ウラジミール・マクシーモフとかヴィクトル・ネクラソフ、ウラジミール・ヴォイノヴィチとかワシーリイ・アクシヨノフ、あるいは音楽家にしても、チェリストのムステスラフ・ロストロポーヴィチ、その妻であるポリシヨイ劇場のソブラノ歌手ガリーナ・ヴィシネフスカヤをはじめ、すぐれたバイオリニスト、ピアノリスト、あるいはいま日本でも人気のあるバレエ・ダンサーのミハイル・バルイシニコフといった文化の活動家たちが相次いで国外に亡命しています。リュビエーモフも八五年、ロンドンでドストエフスキ原作『罪と罰』を演出をした直後にソ連市民権をはく奪され、映画作家のアンドレイ・タルコフスキも、八四年、イタリヤで「ノスタルジア」を完成後、亡命を余儀なくされました。このような一流の芸術家たちが、ソ連を去らなければならなかった

直接的な責任者としてデミチエフがいたわけです。そのデミチエフが更送されたのは、やはり、新しい人事を通しての世代交代と言えらると思います。ゴルバチョフのやるうとして、本格的な自由化というものを進めていく上での世代交代と言ってもよいか、というふうに思います。

ここで、少し映画の問題について触れますと、一九八五年の末頃からゴスキノーにたいする批判が行われています。このゴスキノーの議長がエルマーシェンという人です。そこで批判されているのは、ソ連映画のレパートリーの弱さとか、検閲の問題なども関わってきています。実際に、タルコフスキの作品をはじめ、多くのものが上映禁止になった状況が長いこと続いていたわけで、それが最近になって公開されるようになっていきます。

昨年の五月十三日から十五日にかけて、第五回ソ連映画活動家同盟の大会が開かれ、六五年、『第一の雪解け』が終わった時以来、ずっと第一書記をしていたクリジャノフが解任されて、その後釜としてエラム・クリモフが就任しました。しかも、指導部の三分の二が新人ですから、指導部がほとんど変わってしまったということですね。

クリモフという監督も、「歯科医の冒険」とか、「苦惱」という作品をつくっていますけれども、それが一般公開されたのが八五年の十一月でした。非常に長い間、上映禁止の処置を加えられていた映画監督が、映画活動家同盟の第一書記になっていくところには、明らかに変化がみられるのではないのでしょうか。いま日本でも上映されているアレクセイ・ゲルマンの「道中の点検」が、十五年ぶりに公開されたというこ

ともあります。これまで公開されなかった作品が、次から次へと公開され始めていることも、映画界における新しい動向として歓迎したいと思えます。

ところで、どういふ理由でこれらの作品が公開されなかったのか。まだ全部見ていないので、はっきり断定はできないのですが、多くは作品のテーマにその理由があったようです。たとえば、過去におけるスターリン時代の否定面を描き出そうとすると、それにストップがかけてしまうということです。

過去を主題にすることは、もちろん意味のあることですが、そこに、どれだけ新しい映画の表現がみられるかということを考えますと、かつてスターリン賛美の映画がソ連ではたくさんつくられていたわけですが、素材主義といえますが、それをただ裏返しにしただけのスターリン批判を主題としたものが今回は認められたにすぎないのではないかと、いう気もします。

つまり映画の技術とか、あるいは表現方法ということとで考えていくならば、主題を表現する方法においてはあまり斬新なものを持っていない、という気がしてなりません。

タルコフスキ作品も公開へ

それに対して、たとえば国外に出ているタルコフスキのような作家、間もなく日本でも上映されますけれども、スウェーデンで撮られた「サクリアイス」という映画を試写会で見る機会がありました。「サクリアイス」というのは、ロシア語では「ジェルトヴォプリナシェーニエ」と言いますが、「犠牲」とか、

「献身」という意味です。原作は『コンチネント』という、マクシーモフが編集長をして、いまパリで出ているロシア語の雑誌の最新号に載っており、私は、それも読みましたが、そこで提起されている問題は、今日の人間の置かれている状況そのものだとということでは、

つまり核戦争の危機に直面して生きていかなければならない人間に何が出来るか、というテーマです。世紀末といおうか、「黙示録」的状況にも似た舞台設定です。この映画の提起している問題は、まさに今日の人間の置かれている状況を、一つの世紀末として捉えていこうとする視点に支えられていると言えます。世界の救済のために一身を犠牲にするという非常に宗教的な問題をはらんでいて、最近の世界のどの映画よりも強いアピールをもって問題を提起しているような気がします。そこでタルコフスキイが試みている表現の問題は、やはりソ連の国内では許されていなかったという理由が理解できるような気がします。

タルコフスキイは、昨年十二月二十八日、ガンのためにパリで五十三歳の若さで死にました。「サクリフアイス」は彼の最後の作品となったわけです。ソ連国内で撮ったものでは、「僕の村は戦場だった」(六二)「アンドレイ・ルブリョフ」(六七)、「惑星ソラリス」(七二)、「鏡」(七二)、「ストロカ」(七九)があり、イタリアで「ノスタルジア」(八三)を撮って亡命したわけです。

その「ノスタルジア」にしても、冒頭のシーンは、イタリアの風景があって、それがいつの間にかロシアの風景に変わっていく長い場面がありますけれども、つまり、イタリアにあってロシアを思うという構図で

す。「ノスタルジア」というのは、まさに祖国に対する郷愁であると同時に、今日の人間が失ってしまったものへの回帰でもあります。距離的にはロシアへの思いがあり、そして時間的に言えば、過去の人間の精神への回帰というものがあるのです。

そういう意味で「ノスタルジア」が表現している世界は、「サクリフアイス」にそのままつながってくるものです。一応、ソ連でもタルコフスキイが死んだ時には、「偉大な映画作家の死」という形で報道されましたし、ソ連国内でつくられた映画も長い間の上演禁止を経て、先ほどからの映画界の動きと絡んで公開されるようになったそうです。今度「サクリフアイス」も、ソ連で公開されるといふニュースを聞いています。実際に公開されたかどうかはまだ分かりませんが、おそらくはもうしばらくは時間がかかるのではないかと気がいたします。タルコフスキイ自身は、そのような質問にたいして、死を前にして、「ほとんど二十年間も私の首を締めるようなことをしておきながら、なにこともなかったかのようなふりをしていく」とマクシーモフに語っています。

今後、タルコフスキイのような作品がソ連で本当に自由につくられるのかどうか。タルコフスキイは死にましたが、彼のつくった作品と同じようなものが創造できるかどうか、今後の問題ではないかと思えます。そういう意味では、タルコフスキイの作品がソ連国内で上映されるようになったのは喜ばしいことです。あのような作品を見るなら、若い映画作家たちにとってはものすごい刺激になるはずで、本当の意味での映画界での表現の革命と言いますか、表現の大胆な冒険が開始されるだろうという気がいたします。

第八回ソ連作家大会での論議

一方、文学界に戻って考えますと、昨年の六月二十四日から二十八日にかけて第八回のソ連作家大会が開かれています。恒例になっているのですけれども、大会を前にして、「作家大会によせて」というような文章が『文学新聞』に発表されます。今回は、作家のベニアミン・カヴェーリンが「作家大会に期待する」という形で原稿を寄せております。

一九六七年、第四回ソ連作家大会が開かれた時に、ソルジェニーツィンが、『ガン病棟』をはじめとする自分の作品が公刊されていない、「グラブリト」という検閲機関がロシアの文学をダメにしてしまっているとして、検閲の廃止を訴えた手紙を大会の代議員にあって出してあります。

その手紙は、もちろん握りつぶされ、公開されなかったのですけれども、そのソルジェニーツィンの第四回作家大会への手紙を支持したのがカヴェーリンでした。カヴェーリンは、一九二〇年代の「セラピオン兄弟」という同伴者作家のグループのメンバーですけれども、彼にしてみれば同世代のすぐれた作家や詩人たちが、自殺したり亡命したりあるいは粛清されたことが忘れられなかったのでしょうか。カヴェーリンは、ちょうどロシア革命の時に青春を送った世代の作家と言ってよいと思います。彼と同世代に、ブルガーコフ、アフマトワ、バステルナーク、ツヴェターエワとかいう人たちがいるわけで、親しい友人であるマンデリシユタムも粛清で死んでいます。

そういう自分の親しい仲間たちを失った世代の名に

おいて、カヴェーリンは、それこそ「グラーヌノスチ」(公開の自由)をソルジェニーツィンとともに訴えていたわけですが。今回の「作家大会によせて」の文章を読むと、第四回作家大会の時には活字にならなかつたものが、いまのソ連で活字になっているわけです。

つまり「サミズダート」という言葉がありまして、「地下出版」とか「秘密出版」という意味でですけども、地下出版でかつて彼の語った言葉が、いま「文学新聞」で活字になっている。やはり、時代は変わりつつあるということでしょう。

その大会の議事録をみますと、確かにカヴェーリンが望んだような、非常に率直で誠実な討論が行われていたというふうに考えられます。

いろいろな人たちが発言しています。たとえば、詩人のアンドレイ・ヴォズネセンスキイの発言は非常に注目されます。彼は、その発言の中で、モスクワの作家組織がきちんとした代議員を送り出しているかどうかという問題をしています。女流詩人で、いまソ連で最も人気のある詩人の一人とされていますけれども、ベラ・アフマドワリーナが代議員にはなっていないとか、ブライト・オクジャヴァもやはり代議員になつていないと、ヴォズネセンスキイは具体的にあげています。あるいはコンドライチェフとか、アルセイニ・タルコフスキイたちがこの会場にいたならばどんなに素晴らしいことかとも、彼は言っています。

『ドクトル・ジバゴ』の出版を提案

その発言でもっとも注目されるのは、やはり、パステルナークの作品を出版すべきである、という提案です。

す。モスクワ郊外のベルジェルキノという別荘村にある、パステルナークの住まいを博物館にすべきではないか、と言うわけです。ちなみに、ここにはパステルナークの遺族たちが住んでいましたが、追い出されて、いまは博物館委員会が管理しています。

パステルナークの子供であるエヴゲーニイ・パステルナークが、自分たちが住み、父親が仕事をしたその家から、自分たちがたたき出されなければならないのはなぜなのか、というようなことを言っています。それ以降、エヴゲーニイは、父親の仕事をまとめる作業を継続し、散文の一部が二巻もののパステルナーク選集として、昨年ソ連で出版されました。

アメリカのミシガン大学で、四巻もののパステルナーク全集がロシア語で出ていますけれども、これも国外でロシア語になったもので、ソ連国内ではまだまだ目の目を見ていないわけです。

その中で問題になるのは、『ドクトル・ジバゴ』という小説です。これは、ソ連では発表されなままイタリヤの出版社から刊行されて、それがノーベル文学賞の対象となったことから、いわゆる「パステルナーク事件」が起こって、パステルナークはやむを得ずノーベル賞を辞退せざるをえませんでした。これも一九五八年のことですから、ちょうど「雪解け」が始まった直後でのぶり返しと言いますか、凍てつきと言つてもよいと思います。

そのパステルナークの『ドクトル・ジバゴ』を出したらどうか、ということがヴォズネセンスキイによって提案されたわけです。これはヴォズネセンスキイだけではなくて、詩人エフトウシエンコもそう言っています。

それからリハチョーフという、アカデミー会員で、非常に実力のある文献学者が、パステルナークだけではなくて、たとえばベリミール・フレープニコフという未来派の詩人の名前をあげて、これも全集を出すべきだとか、あるいはグミリョフとか、過去のロシアで活躍して、長い間発禁になっていた詩人や作家たちの作品を活字にすることが大事なんだ、ということを主張しています。

多くの芸術家たちがきわめて悲劇的な最期を遂げている例は、二〇世紀のロシアの場合、数えあげられないほどあります。それこそ大文字で書かれるべきであった詩人たち、たとえばセルゲイ・エセーニンが二五年、ウラジミール・マヤコフスキイが三〇年に、それぞれ自殺をしています。つまり、マヤコフスキイのように、『私の革命』という形で革命を受け入れた革命詩人が、自殺しなければならぬ状況があつたのです。あるいはさきほど述べましたツヴェターエワも自殺しています。グミリョフのように銃殺された詩人、そのほかにマンデリシュタムのような肅清による死。あるいはパステルナーク。長い沈黙を守つて、そして晩年になって、『雪解け』の季節だからこそ発表できるのではないかと期待して発表しようとした作品のために、パステルナーク自身が迫害を受けるような状態。そういう人たちの作品を刊行しよう、しかもきちつとした形で出すべきである、ということが言われたわけです。

過去の大家作家たちの復権

二〇世紀のロシア文学史を書きかえていく上にも、

これはどうしても不可欠なことです。一九世紀のロシア文学は、日本でも非常に愛好されていますけれども、二〇世紀、あるいはソビエト文学というとなかなか読まれないと言いますが、つまらないものだと思うわれています。しかし実際は、つまらないのではなくて、本当にすぐれたものもたくさんあり、それがこれまでソ連では完全なたちで公刊されなかっただけの話です。たとえばブルガーコフの作品は、死後四十何年ぶりに活字になったわけですが、それが読まれば世界的な評判になり、二〇世紀文学の古典として復活してしまおう。

つまり、ブルガーコフのような作品を読む読者がいる時、おそらくあれぐらいの水準で書かなければダメなんだ、ということをや、きつと作家たちは思うのではないか。そうすることによって文化全体が変わっていくことが考えられるので、その意味では、こういう過去の人物たちを復権していくというのは、非常に大切なことだと思えます。

ついでに言っておきますと、昨年の第八回作家大会では、それまで第一書記だったマルコフが、パステルナークの作品の発表はあり得ない、と言っていたのに対して、これはもう計画に入っている、と反論する人もいました。マルコフは、結局、第一書記から作家同盟議長になりましたが、これはある意味では祭り上げられて、直接的な影響を及ぼさなくなったとみてよいでしょう。これもまた一つの世代交代ではないでしょうか。

その後任が、ウラジミール・カルポフという作家で、『新世界』という雑誌の編集長です。『新世界』は、それこそソルジェニーツィンを世に送り出した

り、エレンブルクの『回想録』を出したり、ブルガーコフの作品を発表したりした、いわば『雪解け』派の牙城でした。この時の編集長が詩人アレクサンドルトワルドフスキイでした。

そういう意味で『新世界』は、『雪解け』を準備して、『雪解け』を推進した最もすぐれた文芸雑誌ということが言えるのですけれども、トワルドフスキイが解任されて以降は、『新世界』もあまり冴えなかつた。が、ここ二、三年ちょっと変わりつつあります。

それを準備していったのが、カルポフという編集長だったわけですよ。そして、やはり、ここでも新たな『雪解け』をめざすカルポフが第一書記になっている。映画活動家同盟の第一書記になったのが、上映禁止処分を受けていた映画作家であったように、ここでもまた同じような動向がうかがえるわけです。

ヴォズネセンスキイが、この会場にはアフマドゥーリナがいない、オクジャヴァがいない、と言って嘆いていたわけですが、幹部会に選出されたことも注目すべき人たちが、幹部会に選出されたことも注目すべきではないでしょうか。作家大会の最終日の選挙で、アフマドゥーリナも、オクジャヴァも、コンドラチエフやチェルチェンコといった作家、詩人たちが幹部会のメンバーに選出されているという事実。代議員に選ばれなかった者が、幹部会に入ることとは非常に画期的なことですよ。

『新世界』の後任の編集長になったのがザルイギンという作家で、この人は農村派と言つてよいと思えますけれども、『イルティシユ川にて』というすぐれた作品を書いて、例のソルジェニーツィンさえも、ロシアで最もすぐれた散文作家の一人と言つている人で

す。ザルイギンは『嵐のあと』という三部作を書いています。ちょうどアンドロポフ時代の八二年五月に第一部が発表されましたが、それ以降、発表ができなかった二部、三部が、八五年五月に発表されています。『新世界』が、優秀な作品をこれからどんどん世に出していくのではないかと、という期待を抱かせてくれます。ザルイギンは『ドクトル・ジバゴ』を来年の一、二月号に掲載すると語っております。

そういう意味で、『ドクトル・ジバゴ』がソ連で活字になるということは、はっきり計画の中に入ったわけですよ。ザルイギンは、雑誌というものの役目から考えて、パステルナークの『ドクトル・ジバゴ』のような作品を、きちんとした形で発表するのが義務なんだ、と言っています。これは、いままで国外で出たものとは違い、それ以降、パステルナーク自身によって手を加えられた決定稿が出るということです。それになかったならば出す意味がない、とザルイギンは言っています。

それを準備したのが、さきほどあげましたパステルナークの息子エヴゲーニイです。もう六十歳過ぎになっていますが、パステルナークのメモや草稿をすうつと整理してきて、いざパステルナークの全集を出したいと言っています。準備は全部できていて、いつでも出版できるが、その企画がまだ通っていない段階である、とも述べています。だから、パステルナークの『ドクトル・ジバゴ』が来年に活字になって以降、その反響をみてから、全集が出るのではないかと、という気がします。全集といった場合には、いろいろなバリエーションと言いますが、第一稿、第二稿、第三稿といった草稿をきちんとしたコメントをつけて出さな

ければならないので、バステルナークの『ドクトル・ジバゴ』の刊行は意味深いわけですが。

ただバステルナークはいいけれども、それから死んだ詩人や作家たちはいいけれども、現存する作家たちはどうなるのか、ということが問題になってきます。たとえばソルジェニーツィンがどうなるか。これは、どなたも関心のあるところだと思います。

ソルジェニーツィンの復権はいつか

ソルジェニーツィンの作品を『新世界』が発表するか……。そのような問いに対して、ザルイギンは、それはわれわれの仕事ではない、とかなり否定的な言い方をしています。雑誌というのは、単なる再発表の場ではない、ほかで出ているのを雑誌にわざわざ出す必要はない、それは雑誌の仕事ではなくて、出版社の仕事であると言つて、明確に回答することを避けています。

ヴォズネセンスキイにしても、バステルナークはよいけれども、ソルジェニーツィンは自分によく知らない、むしろソルジェニーツィン自身が決定すべき問題ではないか、というようなことを言っております。

そういうことを考えますと、やはり、ここでも、「やつらが愛するのは死者たちばかりだ」というプーシキンの詩の言葉が生きています。つまり、死んだ作家たち、いまは亡き作家たちに関して言えば、かなり寛容になっている。『新世界』がバステルナークの『ドクトル・ジバゴ』の掲載をかつて拒否したときの編集部のお返りや、バステルナークを裏切り者扱いしていた『文学新聞』の社説はどうなるのか。三〇年近く

経ってバステルナークのような詩人が復権されていくこと、あるいは過去に反革命であるとして銃殺されたグミリョフたちを再評価しようとすることは、いずれも結構なことではあるけれども、責任の所在を問わないまま、なしくずしに、これらの文学を古典として祭壇にまつり上げることは許せない。問題は、過去に死んだ詩人や作家ではなく、現在、いま国外にあって書き続けている作家たちがどういうふうな形になるかが問われるべきでしょう。

ソルジェニーツィンだけではなくて、アクシヨノフにしても、あるいはマクシモフにしても、みんな国外でロシア語で発表するしかない。そういうものを国内ではどう扱っていくのか。これこそ、現在の課題なのではないでしょうか。

もう一つ言えば、ナボコフの『ゴゴリ論』をやはり、『新世界』に掲載するようです。ナボコフも亡命作家ですが、ナボコフの小説もいざれ発表されるのではないかと言われています。ナボコフは、現代のロシアだけではなくて、世界の二〇世紀文学を代表するすぐれた技術を持った作家です。ちなみに、ナボコフはロシア語で作品を書いて、それを自分で英語に訳しています。二〇年代の作品から『ロリータ』にいたるまで、すべてそうです。

ナボコフの作品がソ連国内で出ますと、あのような文庫あるいは方法、つまり二〇世紀の文学の実験というものが、ソ連国内にも定着する可能性が出てきます。ただ素材だけが斬新であるとか、あるいは内容が過去の否定面をどきどき描いているからよいか悪いとか、そういう素材論ではなくて、二〇世紀の文学の方法の問題として、それが、今後、ソ連でも検討されるなら

ば、いままで閉ざされたような鎖国状態にあった若い作家たちに強烈な刺激を与えていくのではないかと思えます。過去のすぐれた作家たちの問題を通して、文化そのものが活性化し、それが当然、若い作家たちの今後の飛躍の踏み台になっていくのではないか、という気がいたします。

しかし、バステルナークの『ドクトル・ジバゴ』が出版されると言っても、来年の一月、二月です。ナボコフの作品にしても、一応、出るとは言われていますけれども、具体的にいつになるかはまだ分からない。いろいろところで文学遺産を記念する委員会が設立されて、ヴィソツキイをはじめ、グミリョフとか、そういう人たちの全集を出そう、という動きが出てくるのは確かだけれども、やはり出版までにはまだ時間がかかるのではないか。そのうちに季節が逆流していくと、どうなるか分からないという危険さもあるのではないか、という気もします。

亡命芸術家たちの帰国問題

国外にいる人たち、さつき、デミチエフ文化相のもとで多くの芸術家たちが亡命を強いられたと言いましたけれども、そういう人たちが本場にソ連へ帰国できる日はいつなのか、ということを考えざるを得ないわけですね。

これはまだきちつとしたデータは持っていないんですけども、ゴルバチョフは、いま、外にいる芸術家たちが帰ろうとした時には、おそらく出来るだけ受け入れるだろうと思えます。そういう意味では、いろんな形でコンタクトがとられつつあるという話も聞いてい

ます。

しかしながら、タガンカ劇場の演出家で、いまロンドンに在るリニビーモフは「私はもちろん帰国したい。帰国するけれども、帰国したあと、外で仕事がある時には自由に外に出て、また国に帰れるという保証がある」といふことを言っています。つまり、世界的な演出家ですから、外で仕事をする場合もあるのです、自由に出国して帰国できるような体制であることが望ましいということを行っています。そしてもうひとつ、『ヴィソツキイ』や『ボリス・ゴドウノフ』が、タガンカ劇場で上演が禁止されたことの責任の所在も問うています。ソルジェニーツィンやマクシモフのような、本当に一九世紀のすぐれたロシアの文化あるいは文学の伝統を引き継ぎながら、今日の問題を書き続けている作家たちにしてみても、やはりロシアの読者のためにロシア語で書いているわけです。そういう作品がロシアの読者に読まれる日がいづ来るのか。その日が来た時に、はじめて『雪解け』が本格的な季節を迎えるのではないか。いまは非常に過渡的な状態で、いまのところ具体的に結実したものはまだ少ないわけですが、いつの日か、真の『雪解け』が必ずやくるだろうと期待したいと思えます。

『雪解け』はいまのところはまだ作家とか知識人が中心ですが、そういう人たちの努力によって、この動きを二度と逆戻りさせてはならないという気がいたします。その意味で、今後の動きをもっと注目したいし、おそらくそうせざるを得ないところに、いまのゴルバチョフの置かれている立場もあるのではないかと思います。

質疑応答

堀（東京） 本当の『雪解け』がやってくるのは亡命作家が国内に戻ってくる時だと、先生はそういうことに大変大きな期待を持っておられるようですね。けれども、果たしてそういうことを促すような国内の具体的な動きと言いますか、たとえば作家同盟とか映画活動家同盟の中で、それを具体的に推進するような動きがあるかどうか。

それとタルコフスキイの作品ですが、タルコフスキイがあれだけ新しい映画をつくりながら、長い間国内で活動できたということですね。彼の作品が、スターリン批判の裏返し素材主義でなくて、新しいものであったとするならば、どうしてタルコフスキイが十分活躍できたのか、その理由が分からないのですが。

水野 亡命作家、あるいは亡命している芸術家たちに関して、作家大会あるいは映画活動家同盟の大会の席上では、その話は具体的には出ていません。ソ連の作家たちが具体的に述べた資料はないのですけれども、たとえばヴォズネセンスキイがアメリカに旅行した時に、アクションノフと会っています。その時には、ヴォズネセンスキイは、もちろん、アクションノフにも帰ってきてほしい、ということを行っているそうです。これは聞いています。

ヴォズネセンスキイもアクションノフも同じ世代で、六〇年代に『雪解け』を推進していた人たちですから、非常に親しいわけで、これは必ずしも全体の傾向というよりも、むしろ友情みたいなもので、アメリカでも自由に会える。ヴォズネセンスキイのように、

外に出られる人は、外国にいる亡命者たちと自由に交流しているわけですね。そういう意味で、アクションノフとヴォズネセンスキイは、もしかしたら例外かも知れません。

ヴォズネセンスキイにしても、アクションノフはいけれども、ソルジェニーツィンは——という感じがあるのでしょうか。

しかし、ソルジェニーツィンが帰国しなければ、本当の意味での『雪解け』はないのではないかと。やはり、ソルジェニーツィンも帰国を願っているわけだけども、これはまだもう少し時間がかかると思いますが、それを活字にして、データとして使える段階ではまだないようですね。これは、もう少し動きがはっきり出てから言わなければいけないかと思えますけれども。

タルコフスキイについて言えば、小説家とか詩人なんかでしたら、紙と鉛筆があれば自分でどんどん書いてしまっておいてもいいわけで、ブルガーコフのように死後何十年経って初めて活字になるということもあるのですけれども、映画の場合でしたら、ものすごくカネがかかるわけで、それこそゴスキノーがたぐさんのカネを出さない限り出来ない。そういう意味ではタルコフスキイが、ソ連国内でも、「ストリーカ」とか「惑星ソラリス」とか、「アンドレイ・ルブリョフ」をつくれたというのは、非常に恵まれていたと思えます。それはやはり、恵まれた時期だったのではないのでしょうか。

つまり、つくることが構わないといっても、つくって試写にかけられて、そこで検閲がどうであるか、ということが実は問題なのです。たとえば「アンドレイ

・ルブリョフにしてみてもずいぶん長い間、ソ連では公開されなかったわけです。公開といっても、ごく一部のの人たちに見せるだけで、街の映画館で上映されるという性質のものでなければ、ちよつと意味が違うと思います。死ぬ間際まで、タルコフスキイがソ連で受けたい屈辱を忘れなかったことには意味があります。

タルコフスキイの作品については、表現方法の斬新さということを言いましたけれども、ソ連の場合、非常にすぐれた映画の伝統を持っていると思います。エイゼンシュテインとか、ドゥッペンコとか、ちよつと映画のつくられ始めた時の世界的な巨匠たちがいて、みんな大胆な実験を試みていました。そういう意味では、スターリン批判後の状況の中で、もう一度その辺がよみがえろうとしたんだろうと思います。

これは我田引水なんですけれども、ロシアの「アヴァンギャルド」の活動という問題が二〇年代で開花して、スターリン時代に完全に弾圧されてしまったわけですが、アヴァンギャルドの方法というのは、まさにフォルム（形式）の問題だったと思います。あるいは芸術の方法の革命であったかもしれません。やはり「雪解け」後に、そこに着目する動きが、特に若い人たちの中に出ていたと思います。タルコフスキイの映画の手法を考えれば、モンタージュ理論にしても、全部同じ線上にあるし、ヴォズネセンスキイの詩を見ますと、フレイブニコフとかマヤコフスキイのような、詩的言語の革命を志向した詩人たちと結びついていると思います。

タルコフスキイ、ヴォズネセンスキイの場合は、単なる裏返しとしてのスターリン批判ではなくて、やはり、二〇年代あるいは革命前に回帰する形で、その方

法の伝統を回復しようとしたところに新しきがあった。もう一つ言えば、そういうフォルム革命と言いますか、方法の革命こそが人間の意識というものを変えていくものであって、それだけに権力は、そういうものを恐れたのではないかと思えます。

たとえばフルシチョフなんか、「ろばの尻尾で描いたのではないか」と言って、抽象絵画を批判しました。一九六二年のことです。抽象絵画と社会主義リアリズムの絵画を見ると、全然違うわけです。現代でもロシアでは、抽象絵画を描いている人たちもいますし、これは表には出ないとしても、また国外に亡命した人もたくさんいますけれども、それにしても、やはり、二〇世紀のロシア美術の到達点と言いますか、マレーヴィチのシュプレマティズムとか、タトリンの構成主義と結びついています。そういうわけの分らない絵は、権力者にとってみれば非常に不安になるのではないのでしょうか。もしかしたら何か自分には分からない暗号が仕掛けられているのではないかと、疑心暗鬼になるのだらうと思います。

音楽にしても、現代音楽は単なる音の雑多な集団にすぎない、という形で、ショスタコーヴィチやプロコフィエフにたいする形式主義批判が何度か行われたわけですが、そういう形式主義批判が狙ったのは、ただ単に形式の問題ではなくて、まさに芸術の本質としてある問題でした。文学、映画、美術、音楽を含め、芸術は、人間の意識そのものに新鮮な衝撃を与えることによって、ただ伝達する機能としての言語ではなくて、人間の意識そのものを変えてしまうような言語の力というものを持ち得たのではないか。

だから、タルコフスキイも、六〇年代のヴォズネセン

スキイも、そういう意味ではるかに危険性をはらんでいるのだらうと思います。タルコフスキイの映画を、いまロシアの人たちが見た時に、やはり、これまでの映画とは違うもの、つまり、その映画を見る前と、その映画を見終わったあと、その人自身の意識そのものが変わるような印象をもたらされるのではないのでしょうか。いままでの古い秩序とか、既成意識、そういうものからはみ出してしまおうような危険な仕掛けを持っているのが文学や芸術なんではないか、という気がします。

古本（中日） 私、フルシチョフ時代の雪解けから、凍てつきの時代、ブレジネフの時代を経験しておりますだけに、お話を興味深く拝聴しました。

芸術、特に文学は、本質的に反権力的な傾向をどうしても持つてくるんじゃないだらうか。ソルジェニーツィンに、私も、六六年に会ったことがあります。もちろん文学自体としては、先生のおっしゃる通りだと思いますが、亡命してからの彼の政治的な活動、ほとんど社会主義リアリズムを無視するというか、逸脱したような行動が、いま彼を復活すべきかどうかという争点になっているんじゃないかと思えます。その点が一つ。

死んだ人、国外にいる人、それはよく分かるんですが、現代の若き作家群の中で、もちろん使徒組もおりますし、そうでない人もいるでしょうが、果たしてどんな人がいるのでしょうか。

最後は要望になりますが、決して現代のソビエト文学は、つまらない作品ばかりではないということをおっしゃった。それにしても日本における出版件数が非常に少ない。これは出版社にも問題があるし、それに

携わるロシア文学者にも少し問題があるんじゃないか
と思いますか。

水野 そうですね……。 (笑)

確かにソルジェニーツィンの場合、日本に来た時の
発言なんか、皆さんお聞きになって、ひどい話だと思
われたのではないかと思います。つまりソ連国内であ
いいう形で権力に向かって反逆し続けた作家が、もう
一つの世界に行ってしまったら、その世界を容認する
ような印象を与えかねません。私なんかも、日本に来
た時のソルジェニーツィンの発言を、やはり認めたく
はない立場なんですけれども。しかしながら、ソルジ
エニーツィンがああいうふうなところにまで追いつめ
られていったというのも、やはり、現代の歴史だった
のではないのでしょうか。

作家の場合、いろんなじくじくの道を歩んで行く
し、もうちょっと理性的に抑制しようと思えば出来る
ところを、一気に突っ走ってしまうこともあるのです
ね。すぐれた作家で、作品そのものはよいのだけれど
も、その人の世界観と言いますか、考え方というのは
非常に奇妙な人たちというのはいるわけで、ドストエ
フスキイの作品を誰も否定はしないけれども、ドスト
エフスキイの社会評論みたいなもの、『作家の日記』
なんかで書いている問題は、非常に奇妙なものがたく
さんあるわけです。

その意味でソルジェニーツィンの発言に対しては、
私は批判したいと思うのですけれども、やはり彼の作
品を文学的にどうみていくかということが、一番大事
なものではないかと思えます。その時その時の政治的
な発言は、時間がくれば答えは出てしまうわけですか
ら、文学作品に即して彼をみていきたいと、いまのと

ころは思っています。

つまり、作品の力でですね。結局、いま書き続けてい
る長編がダメだったら、いくら英雄的な作家であつて
も、作品そのものが問われていくのではないかと、とい
う気がします。

いま外に出ている作家で、たとえばビクトル・ネク
ラーソフとか、あるいはマクシーモフ、こういう人た
ちも、確かに社会主義という概念を否定してしまつて
いると思えます。社会主義もファシズムも、両方とも
全体主義という形で彼らは否定して、精神の自由を訴
えています。これはどんなところにおいても、作家たち
が考えなければいけない問題なのではないかと思いま
す。

そういう意味で、作家が権力とぶつかるのは仕方が
ないので、その時その時によって、作品が発表されたり
発表されなかつたりする、その時どきの権力との関係
みたいなものも言わざるを得ないわけですが、
マクシーモフやネクラーソフのような作家もロシアの
現代文学として認めたいと思えます。たとえ国外にあ
つても、ロシアの読者のために、あるいはロシア語で
書き続けている作家を、現代のロシア文学という形
で、私たちは受けとめていく必要があるのではないかと
思います。

たとえば、ドストエフスキイにしても外国で書いた
り、ツルゲーネフのように長い間ヨーロッパに滞在し
て書いた作家も多いわけですから。そういうふうに考
えていきたいと思えます。

もつと若い世代ですが、きょうは「ゴルバチョフ政
権下」という形なので、そこで出てきたということに
限ると、まだほとんど出てきていません。これから出

てくるのではないかという気がします。ザルイギン編
集長の話によりますと、『パンのみによるに非ず』を
書いたドゥジンツェフとか、テンドリャコフとかの作
品も活字になるそうです。テンドリャコフはすでに亡
くなりましたが。

ヴォズネンスキイが、一緒に協議して、今度の作
家同盟の発言を準備したという作家の名前をあげてい
ますが、日本では『死者に痛みはない』という作品が
翻訳されているワシリイ・ブイコフとか、アブラーモ
フ・アスターフィエフ、ラスプーチンなどです。彼ら
は五十代以上で、若い作家というわけではないですけ
れども、やはり、すぐれた作家たちだと思います。

国内であつて、この一、二年と言われますと、ちょ
つと困難ですが、たとえばこ一〇年ぐらいの幅をと
つてみると、まだ国内にいた作家は執拗に抵
抗し続けて、なかなか活字にならなかった人たちがお
ります。ブイコフとか、ペローフとか、ラスプーチン、
つい先日亡くなったテンドリャコフとか、シユクシー
ンとか、トリリーフォノフのような作家の仕事は、国内
にいながら執拗に抵抗しながら、よい文学的成果を
おさめている人たちというふうに考えられます。

一番最後の点は、私も含めてまだ仕事が多分でない
と思えますけれども、一九六〇年代には「ソビエト文
学十八人集」(新潮社)とか、「新しいソビエトの文
学」(勁草書房)など、私たちの編集したシリーズも出
しましたけれど、それ以降、国内のものがあまり面白
いものがなかったもので、ちょっとサボっていて、むし
ろ国外で出たすぐれたものが出版されています。ソル
ジェニーツィンはほとんど全部訳されていますし、マ
クシーモフにしても二冊翻訳が出ています。それから

過去の作家、二〇年代から活躍し、ソ連公認の文学史では不運な作家の翻訳もなされています。私もブルガーコフを四冊訳しております。それからペーリイやザミャチンとか、ユーリイ・オレーシャとか、パーベリといった人たちの、二〇世紀の古典ともいべき作品は翻訳が出ています。ただ、一度出て売り切れてしまると、なかなか再版してくれないんですね。ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』は三万部以上出しましたが、いまは一冊も在庫がありません。

私なんか、大学で、「二〇世紀ロシア文学史」の邦訳文献のリストを学生に渡すんですけど、三〇〇点くらいは出ています。三〇〇点出ていて、学生たちが読もうとすると、「もう売ってないですよ、先生」と言うわけですよ。つい三年前までは売っていたのが、いまは全部なくなってしまっている。文庫でさえ、そうです。ソルジェニーツインだって、いま新潮文庫からはずされつつあるところですよ。

ですから、われわれも努力しなければいけないけれども、出版界はかなりいま曲がり角にきているのではないのでしょうか。つまり、ロシア文学だけではないんですね。いい外国文学、フランスの現代文学だってほとんどが売れないし、現代の日本のいい作家のもの、純文学となれば、やはり、それほど売れないのではないのでしょうか。売れるのはもちろんありますけれども。だから、本当に少数の人に向かってやるしかない、という感じがあります。でも、本当にすぐれた作品だったら、一〇年後、二〇年後にはまた必ず復活できると思います。

コマロフスキー（ソ連大使館） 水野先生のとて面白い話を聞いて非常に参考になりました。けれど

も、率直に申しあげますと、先生の話を聞いて、私は、非常に不思議な感じがしました。先生のお話によりますと、現代のソ連の一番すぐれた作家は、自分の個人的な創造の自由のため亡命した作家だけ、ということになります。そして、もし古本さんから質問がなれば、現代において非常に積極的に活躍している作家については、一言も触れなかったかもしれない。

しかし、私の考えでは、もし、いまのゴルバチョフ政権下のソ連の文化の実態について発言するならば、まず最初に、ソ連の国内で活躍する文芸家について言及しなければならぬと思います。なぜかと言いますと、彼らは、自分の個人的なことだけではなくて、全国民の自由のために闘った。非常に難しい、非常に厳しい環境の中で闘っていた。たとえばアスターフィエフとか、ラスプーチンとか、あるいはチンギス・アイトマートフさんについては全然触れなかったけれども、そういう人はいまだたくさんいます。そして彼らの作品の文学的な価値は、亡命した作家よりずっと高いのです。私の印象では、日本では亡命するとすぐ翻訳します。向こうで非常に苦しい生活を送っていて闘っている人々がいても無視する。これはあまり正しいことではありません。

たとえばアスターフィエフの『淋しい推理小説』という作品は、ソルジェニーツインよりは、政治的な点からみると、特に文学的な価値の点からみると、もっと高いすぐれた作品であると思います。

そこで、私の具体的な質問ですけれども、これから日本のロシア文学の専門家は、アスターフィエフとか、ラスプーチンその他、自分の国の中で自分の国民のために、精神的な自由のために闘っている作家の作

品を翻訳する計画がありますか。その見通しはどうですか。

水野 きょうは時間も限られていまして、一応、ゴルバチョフ政権下、ここ二年間のという形で、それ以前のものについては触れなかったのです。それについては、最近、わたしの書いた『囚われのロシア文学』（中公新書）に書いてありますので、それ以降をきょうはお話しようと思ったもので、省略したのです。国内にいるラスプーチンとかアスターフィエフとかいう作家たちについても、私は無関心ではないし、ラスプーチンについては、私もいろいろ書いたり、紹介もしています。ラスプーチンのものは、『生きよ、そして記憶せよ』『最後の期限』『マリヤのための金』の三つが日本で翻訳されています。アスターフィエフも翻訳が出ています。いま、シユクシニンとか、そういう人たちも翻訳が出ていて、「現代のロシア文学」という形で、群像社というところから全十二巻ぐらいの計画で、現代のロシアにいる作家たちの作品が出版されつつあって、まだ四、五冊ですけれども、これはずつと出る予定です。

きょうはここ一、二年と限ったもので、ラスプーチンも、ここ一、二年には何も発表していないんですね。あるいは書いても発表できないのかもわかりませんが、それでも、そういったものが今後発表されるだろうとは思っています。一、二年と限ってしまったもので、国内の動きが出なかったというふうに理解していただきたいと思います。もちろん、国内で頑張っている人たちがたくさんいて、そういう人たちの仕事が、今後どんどん活字になるだろうと思います。

高田（共同OB） 一般に評論家などの話によりま

すと、いまのゴルバチョフ政権は五〇%・五〇%だと、非常に危ぶまないというようなことを言われているようです。いま確かにサハロフ博士なども、非常にゴルバチョフに心酔しているようですから「雪解け」がいまはありますけれども、もしゴルバチョフがまた失脚したと仮定したならば、また冬の時代がくるのか、あるいはもうここまで来たら、前のような冬の時代はこないと思うのか。

水野 非常に難しい質問で、私自身はあまり楽観視はしてないんですけども、ちょっと何とも言えないんですけどね。

たとえば「雪解け」の時、ヴォズネセンスキイとか、エフトウシニコたちが始めた時期があります。ところが、一九五八年には、パステルナーク事件があった、それからソルジェニーツィンが出てきて、六一年、あれも「第二の雪解け」ぐらいに期待したもので、なんですけれども、それが作家裁判で六五年に消えてしまっただ。そういうことを考えると、必ずしもすんなりと、無条件で進んでいくとは思わないし、いろいろな形での反対もあるのではないかと思います。

ただ、まだ二年ですから、いまのところよい面が出てくるだろうと思います。そして、何とかよくしようとしていると思いますし、特に政治とか経済の問題から言えば、むしろゴルバチョフが登場してきたのは必然だったのではないかと、という気もしています。

しかし、あまり楽観して、もう何にかも自由になるというふうには思えないし、どんな時代にあっても文学者たちはそれほど解放されはしないんじゃないか。むしろそういう中で、文学というのは書き続けられるのではないかと、という気がします。ちょっと答え

にはなっていないけれども、お許し下さい。

加藤(NHK) 先生は、いまの状況を政治が先行して、文化が時間差をもって後をついていて、と見えていますけれども、私は、むしろ逆で、笛や太鼓の文化の状況が先行して、政治のほうは、みんなが考えているほど、一向に自由化されていない。たとえばゴルバチョフがやろうとしている複数選挙とか、あるいは経済の面での国家企業法の成立もあやぶまれているわけですね。

何か一つのイリュージョンをもって、われわれは受け止めているんですけども、一向に政治や経済の自由化は進んでないのが実情じゃないかと思うんです。

たまたま、きょう「エコノミスト」を読んでいたら、この一月の中央委員会の総会でソリスははっきりしていないんですが、七〇人の発言者があり、そのうちの二〇人がグラスノスチに反対なんです。グラスノスチというのは、共産党にとって害である、あんなものはやめてしまえ、というのが彼らの考え方なんです。

こういう状況で、ゴルバチョフは、官僚も、工場のマネジャーも、一般市民も、みんな自分についてこない。結局、一番ついてくるのは、ものがよく分かる文化人であると、彼は、文化人と同盟しているけれども、その部分だけが大きくわれわれの目に映っている、政治のほうは意外とたいして自由化される見通しはないんじゃないか。私は、そういう見通しなんです。それについてどう思われますか。

水野 確かに文学者たちがまさに笛や太鼓でという感じがあると思います。だから、作家大会とか、映画活動家同盟とか、そういうところにいるんな掛け声

が上がったのは確かだと思うんです。それは、同時に言っていると思いますけれども、実際に結実するのは、「新世界」を読んでみても二月、三月ぐらいからどんどん出てくるみたいですけども、まだこちらに着いてないということもありますが、これからという感じですね。

「第一次雪解け」と言いますか、五〇年代にしても、やはり、作家同盟のほうで先行したということでは言えますね。第二回作家大会があって、それから第二〇回大会があるという形で、作家たちが動き出して声を上げる。しかし、その作品が結実するには、まだまだ一〇年ぐらいかかってしまう。という点で、時間差ということを言ったわけですね。いまのところ、作家や映画関係者たちの掛け声が出ているだけなのではないか。そして、いまおっしゃられたような政治、経済での問題においては、やはり、反対派を抱えているわけですね。

文学の場合も、いま私が紹介したのは、非常にこちらが気に入っている言葉を言っている人たちしか紹介していませんので、もっと違う公式的な人たちもたくさんいます。幹部会の名簿を見ましても、革新派か保守派かと分けますと、やはり保守派のほうが作家でも多いと思います。ただ、よい仕事をしているのが反保守派のほうに多いもので、それで目立つ。作家同盟には何千人というわけですから、その何千人の作家の中で少数派であっても、たとえ一〇人でもよい作家や詩人がいれば、その国の文学というのは十分なんだろうという気もしています。

やはり、文学の中でも必ずしも楽観視は出来なくて、本当に計画が実現されるかどうかということでは

ね。実現されるまでは本当に予想でしかない。どうい
う形で活字になるかを、今後見守るしかないという感
じです。

井出(共同OB) 作家同盟というものがどういう組
織かということをお聞きしたいんです。作品を評価し
て、それを一般に売り出すことを許可するのかしない
のか。そういう権限を持っているところなのか。保守
派という人は共産党員なのか。反保守派は共産党員で
ないのか。あるいは保守派という人は、共産党員でな
くとも、共産党から、いい人間だと認められた人なの
か。どういう内容の組織であって、そしてその組織
をつくる時には、どのような手続きでつくられたの
か。

水野 作家同盟というのは作家たちの組織です。一
九三四年に第一回作家大会が開かれて、そこで成立し
て、一応ソビエトでは作家は全員入っているわけで
す。その作家同盟は出版とはちょっと別として、本を
出す出さないというのは、やはり出版所、あるいは雑
誌の編集長とか、そういう人たちです。ちなみに、今
度『新世界』の編集長になったザルイギンは非党員で
す。党員でなくても、『新世界』という最も重要な文
芸雑誌の編集長にもなれるという意味では、必ずし
も党員かそうでないかは、あまり関係がないと思いま
す。

作家同盟の場合も、私としては、党籍を持つとうが、
党籍を持つてなくてもいい、作品そのものがすぐれて
いるか、あるいはダメか。ダメな作品も、もちろんた
くさんありますし、そんな中からすぐれた作品を見つ
けていくということが重要だと思います。

作品を、テーマ主義で評価したくないというのが、

いまの私の立場です。つまり、こういうテーマが描か
れているからいいという、そういうテーマ主義だけじ
やなくて、それをどういうふうに表示しているのかと
いう問題が、やはり、これから問われてくるのではな
いか。そういう意味で、二〇世紀の世界の文学と同じ
ような視点で、ロシアの現代文学を見ていくと、一九
世紀の延長線上で仕事をしている部分が非常に多いわ
けで、だから、世界の現代文学の影響を受けた時にど
うなるか。その意味で、ナボコフとかいう人たちの問
題と関わりをもたせたいと思ったわけです。

保守派とか革新派とかいうのも非常に便宜的な分け
方で、やはり作家の場合には、その作品がすべてだろ
うと思っっているんですけれども。

井出 個人の自由と全国民の自由、そのどちらに重
点を置くかによって評価が決まるというふうに考えて
いいわけですか。

水野 いや、それもちょっと違うんじゃないかと
……。必ずしも作家というのは、そういうふうに分けら
れないし、みんな、それぞれ読者を考えながら書いて
いると思いますし、あるいは二〇世紀の歴史に対して
責任を取ろうとして考える人もいれば、あるいは自分
の周辺のことを、まあ、ソ連の場合、あまりいません
けれども、私小説的に書いても、偉大なテーマを描こ
うが、自分の身の雑事を描こうが、私から言わせれ
ば、それが文学作品として自立していれば、あるいは
完成度が高く、読ませる力があればよい、という感じ
です。テーマは大きくても小さくても、それを表現し
ていく力そのものが問われるのではないか、という気
がするんです。

井出 テーマがどんなに小さくても、全国民の自由

という立場があるかないかという考え方はあるわけ
でしょう。

水野 いや、それもなくなつていいんじゃないかと
思います。ない作家もいると思います。

(62・4・15 文真・編集部)

水野忠夫氏(ムサの だお) 略歴 一九三七年中国(旧
満州)吉林市生まれ。早稲田大学文学部露文科卒。現在、早稲田
大学文学部教授。二〇世紀ロシア文学専攻。著書は『マヤコフス
キー・ノート』(中央公論社)、『ロシア・ブゾマンギヤルド』(ズ
ルコ出版)、『ロシア語書ノート』(前掲等)、訳書は『コロホフ
『静かなドン』(中央公論社)、『マルガリータ』(巨匠とマルガリー
タ) (集英社)、『マクシモフ』(検校) (河出書房) など多数。近
著に『囚われのロシア文学』(中公新書)がある。